

# 「自己革新」

～行動と意識を変えて、未来を描こう～

## 【基本方針】

1. 組織運営とJCブランディングの向上
2. JCの存在価値を体現させ、LOMの活性化を図る
3. 地域の特性と時代のニーズを融合したまちづくり
4. 子どもと大人が共に学び、生きる力を育む
5. 己を知り、ひとを知る人間力開発
6. 会員拡大

はじめに

戦後の荒廃した日本を復興すべく、青年会議所の灯がともされ、1964年に全国で265番目の青年会議所として、都城青年会議所は設立されました。また同年は、戦後復興を掲げ、日本で初めての世界的なスポーツの祭典として、東京オリンピックが開催された記念すべき年でもあります。あれから半世紀近くの時が過ぎ、再び、日本で東京オリンピックが2020年に開催されることに何かしらの運命を感じながらも、一方で都城青年会議所が56年にもわたり、この地域に根ざした運動や活動が先輩方によって、紡いでこられたことを改めて誇りに感じております。そして現代社会は、戦中・戦後の食糧難に喘いでいた時代から、国民の生活レベルは格段に上昇し、様々な分野での進歩もめまぐるしく、多様に富んだ社会が形成されています。しかしながら、まったく課題や問題がないわけではありません。

昨今、少子高齢化による人口構造の変化やそれに伴う地域社会の疲弊、また、身勝手な事件や犯

罪が多発し、自分の知り合いではなくても、その場に居たから傷つけたなど、「いのち」を軽視するような行動が起こっていることに不安を抱くことがあります。古来より日本人の精神風土として培われてきた、すべての事柄に対して「感謝」や「尊敬」を抱くという心が、希薄になってきているように感じます。これから日本の将来を担っていく若者が簡単に命を落としたり、奪ったりすることに歯止めをかけ、命の尊さと生きられる喜び、ありがたみを感じてもらいたい。そのために都城青年会議所は何ができるのか。「JCしかない時代」においては、先輩方が「明るく豊かな社会の実現」に向かって、力強く運動を展開されていたと推測いたします。しかし現在は、「JCしかない時代からJCもある時代」と呼ばれ、JC以外にも様々な団体が活動をされています。そのような地域社会において我々の目的は、他団体と競うことではなく、この都城青年会議所の「存在意義」や「存在価値」を改めて考えたときに、心身ともに充実した20歳から40歳の青年期に、この地域を牽引する若き経済人の学び舎として、会員が自発的に行動し、先見性のある、また革新的な事業や活動を行う団体として確立されることで、「JCもある時代からJCがある時代」へと変わっていくのではないのでしょうか。そうなることで必然的に新入会員が集い、さらに会員相互で切磋琢磨することにより、自信と誇りを持って活動に取り組めると考えます。

#### 【組織運営の向上】

これまで地域の発展を牽引してきた青年会議所でしたが、時代が進むにつれて社会も大きく様変わりし、価値観や考え方も多様性をおびてきました。JCにおける組織運営においても、定款や諸規程は遵守しながらも変えるべきところは変え、組織の要として、さらなる進化が必要であると考えます。また、現代社会における労働人口の不足に伴い、メンバー自身の時間的余裕がない中においても組織としての情報共有は、しっかりと行っていかなければなりません。そのためには、現行の運営方法を見直し、重要な事項と簡素化できる事項の選り分けを行い、重要な事項に時間を費やすことで、より能動的な運営を目指すとともに、さらに青年経済人らしく時代の風潮を見極め、新たなシステムを取り入れながら、組織の一体感をさらに高める方法を模索し、より密接な組織を作りあげていくことが必要であると考えます。革新的な創造をもって組織運営に取り組んでまいります。

#### 【JCブランディングの向上】

JCのブランディングは、「何のために」、「誰のために」、実施するべきなのか。これまでのブランディングは、JCが実施する運動や事業をSNS・ITツールを通じて発信する広報活動に傾倒していましたが、我々が行うべき本質的なブランディングとは、まずはターゲットを明確にして、次にJCの価値をメンバー自身が体現できていること、そして、この2つが組織内で理解されていることが重要であります。さらにJCの存在を特別な価値があるものとして高め続けることが必要だと考えます。それがブランディングを進める上での説得力や発信力の高まりへと繋がります。さらに体現者としてのメンバー自身が、これまでの歴史と伝統を継承しながらも、新たな価値観・考え方をふまえたブランディングを実施することで、「JCの存在価値」と「認知度」の双方を高めることが可能になると考えます。

#### 【JCの存在価値を体現させ、LOMの活性化を図る】

都城青年会議所は、20歳から40歳までの責任世代と言われる異業種の青年経済人が集い、運動

や事業を展開しています。メンバーがJCに抱く価値観はそれぞれで異なるでしょう。そのような中で、初めて会うメンバーと委員会と一緒にになり、他人行儀だった関係性から共に活動していくうちに、お互い打ち解けあい、困難な経験を一緒に乗り越えれば乗り越えるほど、友情が芽生え、絆はさらに強くなっていきます。そして、メンバー同士の横のつながり、連帯感をより強固なものにするためには、メンバーの感覚や価値観を刺激するような事業を展開していくことが必要だと考えます。

JCの存在価値をもっとも感じることができるのは、自らが望めば自己成長できるステージがいくらかもあるということです。自らの能力の範疇を超えていると思われることに挑戦する自己修練の機会や、自分の価値観を揺さぶられるような新たな考えや発見を他者から学べる機会が多くあります。

また、都城JCは、50名の現役メンバーが所属している団体であるだけでなく、50社にもなる地元企業、さらには、OB企業も含めれば400社近くの企業と関係性を持つことができる環境にあります。そう考えると、様々な職種や専門分野に精通する企業と関係性が持てるJCのスケールメリットに感じることができます。そして、そのスケールメリットを活用して、「百聞は一見に如かず」の言葉のとおり、それぞれ企業の特徴や特色を見聞し、メンバーの自己成長、またはメンバー企業のスキルアップに繋がられる機会を設けることが可能ではないかと考えます。メンバーが気づきを得ることができる事業を構築していくことで、LOMの活性化が図れると考えます。

#### 【地域の特性と時代のニーズを融合したまちづくり】

私たちが住み暮らすこの都城圏域においては、鹿児島県志布志市の国際戦略バルク港湾として選定されている志布志港と都市とを結ぶ地域高規格道路「都城志布志道路」の工事が着々と進んでおります。そして、近々、金御岳・末吉間が開通することで、宮崎県と鹿児島県の県境が繋がることとなります。さらに、「都城志布志道路」が全線開通することで、地域間の交流を促進するとともに、農林畜産業を主とするこの都城圏域における物流の効率化、経済の活性化、さらには、東九州自動車道の全線開通ともなれば、インフラ整備による多くの企業誘致や雇用創出が期待できます。そうなることで、鹿児島市、宮崎市に続く、南九州第三の都市として、また真の広域交流拠点都市「都城」として、県内外だけではなく国内外にも発信できる都市となり、まちの発展に大きく寄与されると考えます。この地理的優位性を活かした地域力の向上と時代のニーズを捉えた、地域の革新的な創造が必要だと考えます。まずは地域の特性を掘り起こし、自然や風土といった地理的資源、歴史や伝統といった文化的資源を継承しつつ、既存概念にとらわれない閃きと、それを具現化するための調査・分析を綿密に行い、新たな取り組みの創出から地域を創造していくことが、我々JCの取り組むべき「まちづくり」であると考えます。

また、第6回目を迎えます「肉と焼酎のふるさと・みやこんじょ花火大会」を開催するにあたって、市民の皆様地域に魅力を発信する事業として、さらなる愛着を持っていただくために、意識調査を行い、今後の展開に繋がっていきたくて考えております。そして、来場される皆様に「安心・安全」で、より楽しんでいただける花火大会へとブラッシュアップを行ってまいります。

#### 【子どもと大人が共に学び、生きる力を育む】

社会を取り巻く環境はめまぐるしい変化を遂げ、ITやAIなどの普及で利便性や効率化が高まり、欲し

いモノが簡単に手に入る世の中になってきています。しかしその裏で、善悪を判断し善を行おうとする道徳心の低下、命の尊さに対する意識の低下を感じさせるような事件や出来事が起こっています。私たちが幼い頃は、朝・昼・晩の食事の際には必ず「(いのちを)いただきます」と言葉に出し、手を合わせ、感謝をしてから食事をしていましたが、最近はどうでしょうか。食事が単なる食欲を満し、身体を維持するためだけの習慣となりつつあるのではないのでしょうか。日本人が「いただきます」と感謝する慣習は、様々な「いのち」の恵みと、その「いのち」をいただくことに敬意を表してきた素晴らしい文化であると考えます。だからこそ、もう一度、「いのち」の尊さとありがたみを感じられる心の育成が必要だと考えます。

そのためには、子どもと大人が共に道徳心を学び、自尊心や他者を思いやる心を養うことで、人間関係を形成する力も高めることができると考えます。また、何でも簡単に手に入る世の中とは真逆の環境下において、自分は何ができるのか、何をしないとイケないのかといった子どもの考察力、行動力、判断力、直観力といった想像力を刺激するような体験を通して、自立心を育成することも必要だと考えます。さらに、子どもたちの行動や柔軟な思考を目の当たりにすることにより、大人にも驚きや気づきといった学びを得る機会が創出されると考えます。子どもたちが心の活力を養い、自力で課題を乗り越える「生きる力」を身につけることで、子どもたちの明るい未来が拓けると確信します。

#### 【己を知り、ひとを知る人間力開発】

都城青年会議所は、先輩方の活動により「LDの都城」として全国にその名を轟かせてまいりました。私が入会当時は規律を重んじ、礼節を尽くし、施された恩義に対して義理を忘れない先輩方が多く、例会も荘厳な雰囲気がありました。その例会中に実施するLDアワー(3分間スピーチ)の独特な緊張感は今でも覚えています。よってLDアワーは必ず例会では実施すべき自己形成の場であると考えます。

現代社会は、ITツールを用いたコミュニケーションが様々な形で行えるようになり、顔と顔を合わせた直接的なコミュニケーションを交わさずに、非対面的なコミュニケーションを行える環境が整ってきています。しかしそれは、コミュニケーションの範囲を広げることが出来る反面、本質的な人と人との関係性が築きにくい状況でもあります。また、便利で快適な生活が過ごせているはずなのに競争社会や管理社会のなかで、人々が多くのストレスを抱える「ストレス社会」と呼ばれています。これまで都城JCが培ってきた自らを厳しく訓練し、目標に向けて市民と一致協力して進む「指導力開発」を遂行するために「人間力」を学ぶ必要性があると考えます。人間力とは、社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力と定義されています。その人間力を高め、この地域の青年経済人として、組織や地域社会の中で多様な人々と関係性を築いていく上で基礎的な能力(社会人基礎力)について学び、自分自身を知ることから自分に必要だと思われる能力を養うことで、仕事を含めた社会生活において、自発的に物事に取り組むことが出来るのではないかと考えます。さらに、JCで出会った先輩方や現役メンバーの中から尊敬できる人の言動を真似することや負けたくないと思えるメンバーを見つけて、ライバル心を持って物事に取り組むことで、自分の殻を破り、さらなる成長に繋げることができると考えます。

#### 【会員拡大】

青年会議所は、修練・奉仕・友情の三信条を掲げ、この圏域における青年経済人の学び舎として、

また、明るく豊かな社会の実現に向けて、56年間、活動を行ってまいりました。これまで300名を超える卒業生を輩出し、そのJCを卒業された先輩方が、地域経済を牽引されて、さらなるまちの発展に寄与されていることを鑑みても、この都城青年会議所は、この圏域に住み暮らす「ひと」の成長と「まち」の発展に重要な役割を担っている存在であると考えます。ではなぜ、現在の都城青年会議所の会員数は減少傾向にあるのでしょうか。考えられる要因としては、少子化等による人口減少、後継者の減少、労働人口不足に伴う時間的制約、多様化する社会における価値観の変化等の社会的な課題や時代背景による理由が考察されます。しかし、どんな時代であっても課題は必ずあったはずで、また、そのような状況下にあっても、惰性に流されることなく突き進み、どれだけ本気になって取り組み、改善するための行動をできるかが必要なことであると考えます。わかりやすく会員数の今後の推移について説明すると、一人も会員拡大をしなかった場合に、5年後のメンバー数は20名をきります。このままだければ、都城JCはなくなってしまいます。今こそ「危機意識」と「行動力」によって、都城圏域の青年経済人の「学び舎」である都城JCを盛り上げ、より良い事業を構築できるように、また、地域の発展に寄与できるような団体として活動するためにメンバー全員で会員拡大を行いましょ。

#### 【結びに】

「若いうちの苦労は買ってでもしろ」ということわざを一度は耳にしたことがあるのではないだろうか。ここ数年、このことわざが頭に浮かぶことが多くなってきました。なぜなのかと考えたときに、まずは子どもという自分が守るべきものができたということが挙げられます。さらに年齢的に社会の中間を担う世代となり、もちろん教わることも多くありますが、人に伝える立場にもなってきたことが挙げられます。

20代の頃の私は、ことわざにある「苦労」の意味について、単純な考えしかなく、人の何倍も働きヘトヘトになるまで頑張るだけだと思っていました。しかし年月を重ね、多くの人と関わりながら仕事やJC活動等を行っていくうちに、考え方が変化し始め、「苦労」とは経験値、強いて言うならば「失敗すること」ではないかと今は考えています。これまで私も仕事やJCをはじめとする社会活動で多くの失敗を繰り返し、また、若気の至りや意見の相違で生意気なことを発言したこともあります。今思えば本当に恥ずかしいことですが、その経験があって新たなことに挑戦する「心」と「体」が少しずつ培われたのだと感じています。発明王であるトーマス・エジソンの残した言葉にこんな名言があります。

「私は失敗したことがない。ただ、1万通りのうまくいかない方法を見つけただけだ」

この言葉でエジソンの「失敗」とは「諦め」ではないかと解釈できます。私たちのこの限られた青年期は、愚直なほどがむしゃらに突っ走って、ときには泣いて、ときには笑って、自分をみつめ、人に感謝し、自らの可能性や潜在能力を発揮するために、想定外の出来事にも挑戦し、めげそうになっても、挫けそうになっても、諦めずに行動し続ける。そうすることで積み重ねられた多くの経験によって、意識が変わり、次の行動への意欲が高まる。その繰り返しが己の成長に繋がると信じています。

さあ、人生100年と言われる時代のたった5分の1しかないこの青年期、JCで色々な機会と出会い、「自己革新」に向かって少しだけ背伸びをして挑戦してみましょ！